

栗本鋤雲のフランス

——「鉛筆紀聞」のころ——

しお　かわ　ひろ　こ
塩　川　浩　子

パリ外国宣教会の宣教師メルメ＝カション⁽¹⁾が箱館に上陸し、箱館奉行の通訳官に採用されると、幕府医官でありながら箱館在任中だった栗本鋤雲は、箱館奉行の依頼により、カションの日本語教授を引き受ける。安政6年冬（1859年）のことである。これを契機に鋤雲はカションと親しくなり、カションから欧米事情、とくにフランスのことを聞いては、みずから鉛筆でメモした。それをまとめたものが「鉛筆紀聞」⁽²⁾である。

その後、鋤雲は医籍を改めて士籍となり、日本が欧米の文明を受け入れるのは正当であるという判断に基づいて職務に励んだが、出張中のパリで大政奉還を知った。親仏家鋤雲の行動の源には「鉛筆紀聞」体験があるだろう。本論は、その「鉛筆紀聞」を読み解いていく。

1. 「鉛筆紀聞」への道

(1) 蘭学への関心と挫折—観光丸をめぐる

栗本鋤雲（1822-97）は幕府医官喜多村槐園の第三子（喜多村哲三）として江戸の神田猿樂町に生まれた。長兄は幕府の医学館教諭となり、多くの古医籍注釈を著した喜多村栲窓である。哲三は儒学を修め、昌平黉の試験で優秀な成績をおさめたが、不運にも1844（弘化元）年、退学処分を受けた。しかし1848（嘉永元）年、幕府医官栗本家の養子となり、6世栗本瑞見と称する⁽³⁾。医学は医学館教授多紀楽真院に、本草学は曲直瀬養安院に学んだ。いずれも漢方医学である。

ところで蘭学は、規制と弾圧を受けながらも、次第に幕府の内部に浸透していった。幕府はロシアに対する危機意識のために、医学、本草学から天文学、地理学、測量術へと蘭学内の関心領域を広げたが、アヘン戦争（1839-42）と黒船来航による衝撃の後は照準を兵学に定める。すなわち沿岸防備の増強と西洋型軍艦の導入である。他方オランダは、幕府の海軍創設を支援することにより、アメリカ、イギリスとフランスに対抗しつつ、それ

まで享受していた日本における特権的な立場の死守を画策した。そこでオランダ国王は1855（安政2）年、蒸気船スピン号一隻を幕府に献上し、長崎でオランダ海軍派遣隊による海軍伝習を実施する。このとき鋤雲は、海軍伝習所にいた甥の堀貞宗に漢詩を送り、激励している。

さて長崎の海軍伝習は1857（安政4）年に終了する。観光丸と改称したその蒸気船が江戸の幕府海軍所に回航されると、幕府は観光丸を用いた操練を開始し、観光丸試乗希望者を募った。幕府医官鋤雲はみずから応募して幕府の許可を得たが、医官長（御匙法印）岡操仙院は、幕府医官が蘭方を学ぶことは禁じられており、観光丸に試乗して蘭学に接するのは禁令を犯すことである、と許さない。鋤雲は譴責され、蟄居処分を受けた⁽⁴⁾。翌安政5年2月、鋤雲は奥詰御医師上席に復帰はしたが、蝦夷地に任を命ぜられる。蘭学に関心を示したために蒙った左遷である。

(2) フランスとの出会い—箱館の鋤雲

安政5（1858）年5月、鋤雲は箱館に着任した。箱館は僻地であるが、新天地でもあった。

ロシアのブチャーチンが通商開始と国境確定のため長崎に来航したのは5年ほど前の1853年8月のことだった。また1854年の日米和親条約調印により、翌1855年の箱館開港が決定した。そのような状況において幕府は蝦夷地全域すなわち北海道と千島樺太全体の直轄化を画策し、1822年に廃止した箱館奉行を再び設けて（1854）蝦夷地の警備と開拓にあたらせ、また箱館会所を設置して蝦夷地の産物を統制して課税対象とした。

箱館が開港すると、まずアメリカ人貿易事務官ライスが訪れた。ロシア領事ゴシケウィッチは、家族および書記、海軍士官、医師、宣教師、下男、下女など総勢15名を伴って着任した。イギリスの外交代表、総領事オールコックは1859年9月末より10月末にかけて箱館を訪問して領事館を設置し、イギリス領事ホジソンが着任した。イギリス領事はフランス領事を兼ねていた。やがてフランスから、日仏修好通商条約締結の際にフランス側全権委員グロ男爵の通訳を務めたカションが、こんどはパリ外国宣教会の宣教師として、箱館にやってきた。

ところで安政6（1859）年6月から12月までの間に箱館港に入港した外国商船はアメリカ船10隻、イギリス船9隻の計19隻だった。また幕末におけるフランス船の箱館出港が最も多かった年は1866（慶応2）年だが、この年、イギリス船22隻、フランス船9隻、プロシア船9隻、アメリカ船1隻、ロシア船1隻が箱館を出港した。同（1866）年の箱館港における外国船による輸出額はイギリス船によるものが全輸出額の65.5%、フランス船が20.8%、プロシア船12.2%、アメリカ船1.5%、ロシア船0.02%だった⁽⁵⁾。箱館はアメリカ

の圧力で開港し、開港すると真っ先にアメリカから貿易事務官がやってきたものの、箱館における幕末の主要貿易国はアメリカでなくイギリスだった。また領土に興味のあるロシアは優秀なスタッフを送り込み、箱館において存在感を示す国ではあったが、貿易には冷淡だった。フランスは安政五か国条約に滑り込み、プロシアと一線を画すことに成功したが、フランスとプロシアは、日本からどのような利益を得るか、もくろみのないまま日本と条約を締結した。

このような状況の箱館で、蘭学に興味を示したために箱館に左遷された者が、どのようにしてオランダから離れ、イギリスでもロシアでもなく、フランスに関心をもったのだろう。儒医であった鋤雲は、箱館に着任すると病院・医学所の建設、七重薬園の経営に取り組んで本領を発揮した。さらに牧畜事業に関わり、久根別川を浚渫して箱館に至る航路を容易にする成果を上げ、養蚕、紡績などの殖産事業を監督指導し、新たな経験を積む。1859（安政6）年の冬、すなわち鋤雲の箱館着任後約1年半が経過し、カションが箱館に到着して間もなく、鋤雲は箱館奉行の津田近江守正路に、フランス語通訳官となったカションの日本語教授を頼まれ、引き受けた。日本語教授が契機となってカションと親しくなった、と鋤雲は「鉛筆紀聞題言」に書いている。カションと初めて出会ったとき、鋤雲はオランダ、アメリカ、イギリス、ロシア、フランス、プロシアなどの別をどこまで認識していただろうか。

2. 「鉛筆紀聞」

(1) パリ外国宣教会宣教師カション

ローマ教皇庁は1831年、日本と朝鮮半島の布教をパリ外国宣教会に託し、以後パリ外国宣教会は朝鮮経由の日本入国を試みていた。またフランスのインドシナ艦隊のセシユ提督は、日本開国に備えてフランス外交官のための日本語通訳養成を画策していた。そこで日本語修得のために、パリ外国宣教会宣教師をまず琉球に派遣することになり、1844年、マカオに滞在していたフォルカードが琉球に上陸し、二年余を過ごした⁽⁶⁾。1854年に日米和親条約が結ばれると、パリ外国宣教会は宣教師を継続的に琉球に派遣し、日本布教を目指す。1855年、カションとフュレが琉球に上陸し、布教は成功しなかったが日本語を修得した。1856年、フュレとムニクはフランス海軍付司祭などの名目で箱館に足を踏み入れた。

カションは日本語力を買われ、日仏修好通商条約締結を目指すグロ男爵と上海で合流して通訳として活躍した。条約締結後はグロ使節団とともに上海に戻るが、カションはさらに香港に向かい、ロシアの哨戒艇に便乗して箱館を目指し、1859（安政6）年11月、箱館に到着する。外国人居留地におけるフランス領事館付司祭という名目である。安政五か国条約により、日本在留外国人は信教の自由を認められ、教会建設が許されたのだ。

パリ外国宣教会宣教師カシオンは、フランス政府から支援を受けていた。第三共和政が政教分離政策を取る前の話である。

(2) 「鉛筆紀聞」プロジェクト—鋤雲の思惑

鋤雲がカシオンに質問し、カシオンの回答を書き留めておいた記録を鋤雲が編集したものが「鉛筆紀聞」である、と「鉛筆紀聞題言」は言う。以下に、「鉛筆紀聞」そのものにはない番号と題を補って、全29の間の概略を記す。

最初の間はフランスの地方自治体について、第2間はフランスの士農工商について、第3間は世禄と武家の相続について、第4間は農民の租税について、第5間は商人の租税について、第6間は輸出品目の国内価格高騰について、第7間は軍艦用費の支弁について、第8間はフランス軍艦の兵卒水夫の所属と、艦長以下軍艦内人員の俸給制について、第9間は兵卒水夫の募集について、第10間は商人の武器携行について、第11間はフランスの刑罰について、第12間は政府の専売品について、第13間はヨーロッパの一夫一婦制と、女性の地位について、第14間はインドの大反乱について、第15間はヨーロッパ主要国の人口について、第16間はベルギー独立革命について、第17間は摂政について、第18間はフランスの名家について、第19間はフランスの歳入額について、第20間はドルについて、第21間はヨーロッパ諸国の學術の源について、第22間はメートル法について、第23間はナポレオンについて、第24間は電信時代以前の通信手段について、第25間はドルとフランの両替について、第26間は各国の通貨について、第27間は西洋各国の通商・修好と戦争について、第28間は軍艦の建造と購入について、そして最後の第29間は「仏国近来余国に誇示すべき盛挙ありや」と問う。

各間は明快で、その質は高い。たとえばベルギー独立に関する第16間「荷蘭十七州近古割て別にヘルニー一國を立て仏國に領すと云り是其國人の望なりや又仏國強ひて然するや」について。特権的な立場のおかげでオランダから得た情報に基づき、フランスの弱みを握って核心に迫る。回答は当初、明快には程遠く、間は忘れられるが、想定外の展開を遂げる。第16間の回答がナポレオン三世の「歳は五十六太子五歳なり」と言って終わると、第17間はそれを受け、「貴國帝老ひ太子弱し若し一旦不諱あらは國政大事誰に委する」と始まり、摂政について尋ねるのだ。この絶妙な、間の繰り出し方に、編集者の力量が感じられる。

もっとも全29間が有機的に結びついているわけではないし、系統的に配列されているとも言いがたい。たとえば「歐羅巴天子庶人一夫一婦且其婦人を貴ぶ亜細亜に過ぐと貴國亦然りや」という第13間は広い視野から生れ、気宇壮大な菌切れの良い文が的を射る。だがこの間は、なぜ、政府専売品（第12間）とインドの大反乱（第14間）に挟まれているのだ

ろう。

回答は、すべて明快というわけではない。しかし「鉛筆紀聞」の回答の明快度＝カシヨンの回答の明快度、ではない。「鉛筆紀聞題言」で鋤雲は、言語の障壁および鋤雲自身の誤解の可能性に言及し、読者が覚える疑問をも想定しているのだ。むしろ「鉛筆紀聞」の回答の明快度は鋤雲の理解度の指標、と考えるべきだろう。鋤雲は、自分自身の誤解を最小限にとどめる努力をしたらどうか。「鉛筆紀聞題言」の日付「辛酉正月」すなわち1861年初めの頃カシヨンは箱館にいたのだが、鋤雲は編集のさい、疑わしく思われることをカシヨンに確認したのだろうか。「鉛筆紀聞」をカシヨンに見せたのだろうか。「鉛筆紀聞題言」には「唯彼言往々誇己誹人の語あり」とあるが、これをカシヨンは見たのか、カシヨンには隠されたのか。カシヨンは鋤雲の「鉛筆紀聞」プロジェクトをどこまで知っていたのだろうか。

さて「鉛筆紀聞題言」が言うように、29の全問が鋤雲の仕事だろうか。「鉛筆紀聞」は、問も含めてカシヨンが語ったことの聞き書き、29の問答集の形式をとった「カシヨンの口授」である可能性も否定できない⁽⁷⁾。1859年に発表されたカシヨンの日本見聞記に、日仏通商修好条約締結の機会に会談した日本の高官や医師などと、グロ男爵とカシヨンの意見交換の報告がある⁽⁸⁾。たとえば日本とフランスの女性が敬意に値するかどうかの意見交換の報告があり、これは「鉛筆紀聞」第13問に直結する。すでに言及した、あの気宇壮大な問は、鋤雲でなくカシヨンのものかもしれない。

また回答に鋤雲の思惑が紛れ込んでいる可能性も否定できない。もし高齢のナポレオン三世が死亡したら、息子が未成年の間ウージェニー皇妃が統治するかどうかの問題が取り上げられると、カシヨンは日本見聞記では、皇妃が統治する、ときっぱり答え、ヨーロッパの有能な女性を誇る。しかし摂政に関する「鉛筆紀聞」第17問答では、フランスは女性が統治することのない国であると言い、イギリスとスペインの女王に言及し「宮内にありては一人の妻妾、朝廷にたてば億兆の君主、実に夷狄の道にして可笑の甚だしきなり」とカシヨンが言ったとされる。なぜだろう。カシヨンが変節したか、あるいは鋤雲の解釈、誤解、曲解か。「鉛筆紀聞題言」の鋤雲の主張を鵜呑みにして、「鉛筆紀聞」の間は鋤雲、回答はカシヨンと分けて考えないほうが良い。

(3) 「鉛筆紀聞」—カシヨンの企み

① カシヨンのアジア

「鉛筆紀聞」は列強のアジア進出をどのように説明したか。

幕末日本が清国のように領土の一部を奪われる可能性はあるか。インドのように植民地化する可能性はあるか。安政五ヶ国条約でアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フラ

ンスが日本に求めたのは修好通商による実質的な利益ではないのか。

a. アジアへの眼差し

まず清国に向けられたカシヨンの眼差しを検討したい。第9問の兵卒水夫の急募についての回答部分の一部「譬へは支那に事あらんとすれば発船の日将官令を衆軍に申して云う支那の兵恐るに足らず其水恐るへし（中略）支那の砲虜するに足らず其時気虞せざるへからす」に注目しよう。カシヨンは文章のあやとして支那を持ち出したに過ぎないが、鋤雲は心から笑っただろうか。カシヨンの軽蔑の眼差しは清国だけでなくアジア全体に注がれている。

b. 列強の領土的野心

次に列強の領土的野心に対するカシヨンの理解と説明を検討したい。第14問はインド大反乱（シパーヒーの乱）を取り上げ、「英国所有の印度地方英の肆虐を惡み時として背叛の心ありと信なりや」と問う。カシヨンは冒頭、「或然らん唯力不足を以て服従するのみ」と言う。そしてイギリスは隙につけこんでインド内の「ウド」を奪ったので、各国はイギリスの不正に憤ったけれど、「ウド」は同盟国でないので追及しなかった、と明快に説明する。インドの力不足、隙につけこんだイギリスの不正、同盟の重要性が浮き彫りになる。イギリスの不正に憤った「各国」とはフランスのことであろう。カシヨンは鋤雲をフランスへ誘う。

カシヨンの回答は、照準をインドから対馬に移し、さらに続く。列強の東アジア進出に伴い、かねてから対馬が注目されていたのだ。温帯地方に拠点を求めるロシアが対馬征服を企てるのではないかと懸念されていた。フランスの『イリュストラシオン』（1856年3月5日号）に「イギリスが最近カストリー〔対馬浅茅〕湾で行った調査によれば、この地点に5千～6千人の軍隊に守られたロシアの軍事施設が発見されている。この数字はたぶん誇張されたものだろうが、火のないところに煙は立たないものだ」とある⁽⁹⁾。

また「鉛筆紀聞題言」の日付の翌月のことになるが、万延2（1861）年2月にロシアの軍艦ボサドニック号が対馬浅茅湾尾崎に来航し、ロシア軍艦対馬占領事件が起きる。幕府と対馬藩が艦長と交渉し、さらにイギリスが2隻の軍艦を派遣して介入した結果、ボサドニック号は8月15日に退去し、事件は収束した。イギリスが介入したのは東アジアにおける勢力均衡維持のため、と言われていた⁽¹⁰⁾。

さて「鉛筆紀聞」は、イギリスとロシアは等しく、海路の要地である対馬を欲しがっていること、対馬が日本領か高麗領かが新聞で論争になったことを紹介する。対馬を欲しがる者は地形と地勢から高麗への帰属を主張し、そうでない者は歴史の実績を評価して日本への帰属を支持したが、まだ決着を見ないという。

箱館にいる鋤雲にロシアの脅威を説くまでもない。だからカシヨンはロシアの脅威を強

調しない。「鉛筆紀聞」で目に立つのは、アジアにおけるイギリスの領土的野心である。

フランスがインドシナで展開中の政策など、もちろんカシオンはおくびにも出さない。

c. オスマントルコのハレム―「歎するに猶余りあり」

「カシオンのアジア」の最後に、オスマントルコのハレムを取り上げたい。第13問「欧羅巴天子庶人一夫一婦且其婦人を貴ぶ亜細亜に過くと貴国亦然りや」の回答部分に、アジアの一夫多妻のモデルとして、トルコのハレムが登場する。カシオンの関心はハレムで暮らす女性たちの地位や生活にあるわけではなく、ハレムにうつつと抜かした男性たちの引き起こすトルコの没落にある。問の主旨から逸脱したうえに、まず「古盛んにして」と往時のトルコに思いを馳せ、「歎するに猶余りあり其国の不振亦宜ならずや」と結ぶ、詠嘆調に驚かされる。「性の楽園」となりそうな日本の将来を心配するカシオンの憂い顔が見えるようだ。

② 「鉛筆紀聞」の欧羅巴

「欧羅巴諸国の學術其源大抵一なりや」という問がある（第21問）が、「欧羅巴諸国」とはどの国か。第15問で「欧羅巴有名大国當今の人口」を尋ねられたカシオンはフランス、ロシア、イギリス、オーストリア、スペイン、ポルトガル、オランダ、イタリア、トルコ、アメリカの人口を答える。「鉛筆紀聞」の欧羅巴はときにヨーロッパ、ときに欧米である。またトルコはときに欧羅巴、ときに亜細亜である。

カシオンとの交際が始まって1年以上が経過し、「鉛筆紀聞」を編集していたころ、鋤雲にとって欧米は、もはや一つではない。第6問の回答に、イギリスは商業国、ロシアは工業国、フランスは農業国だからフランスは穀物酒類をイギリスとロシアに輸出したがるが、イギリスとロシアの器物什具の輸入は望まないこと、イギリス人は酒好きが少なくて茶飲みが多いのに、フランス人は酒飲みが多くて喫茶人は少ないことなどを付記しているのだから。

a. アメリカの影

柳川春三によれば、「鉛筆紀聞」は「痛く英亞両国をおとしめ」る⁽¹¹⁾。

たしかに第9問の回答に、アメリカに対するカシオンの悪意が明確に読み取れる部分がある。欧米では兵卒水兵の輸入品艦内持込は禁止であり、ヨーロッパでは厳罰に処せられるのに対しアメリカでは黙認される。そこでヨーロッパの人々は「亜国に貴紳なし唯ドルラル（＝ドル）を以て貴紳とすと笑へり」とカシオンは言うのだ。

また商人の武器携行に関する第10問の回答から、アメリカに対する漠たる不安が読み取れる。武器を携行するなら刀剣鉄砲でなくピストルであり、本国では商人に限らず誰も武器を携行しないが、外国とくにアメリカなどに行ったときは「制度未だ定まらざる国なれ

は人々動もすれば私の闘争に及ぶ故に国内民人往々利器を隠し帯へり」とある。

「鉛筆紀聞」のアメリカはこれだけである。貶めるというより、ほとんどアメリカを無視している。

b. イギリスの姿

柳川春三の批評のとおり、「鉛筆紀聞」はイギリスを貶める。たとえば第3問答で、イギリスは長子相続なので父親は次男以下の子のために官を買わざるを得ず、士官等の質にその弊害が現われる、と言う。第17問答では、スペインとともにイギリスに女王がいることを紹介し「宮内にありては一人の妻妾、朝廷にたてば億兆の君主、実に夷狄の道にして可笑の甚だしきなり」と言う⁽¹²⁾。各国通貨に関する第26問答では、イギリスの貨幣は種類が多く、外国人は間違えやすく損をすることがある、と言う。イギリスはいつもいつもカシヨンの目の敵である。

しかし「鉛筆紀聞」がほんとうにイギリスを敵視し、貶めるのは、イギリスがアジアにおいて領土的野心を実現させるときとヨーロッパの商業において成功したときだ。前者については①b. ですでに述べた。後者については次のベルギー独立戦争に関する第16問答の検討過程で触れたい。

c. 遠ざかるオランダ

ベルギーはフラマン人とワロン人の二つの民族から成る複合民族国家だが、ナポレオン時代はフランスに併合され、大陸制度（1806）により、経済的にイギリスとの競争から守られた。ナポレオン没落後ベルギーはネーデルラント王国に組み込まれたが、ネーデルラント王国では商業国オランダに有利な自由貿易政策が取られ、工業国ベルギーのブルジョアジーの不満が高まった。またオランダで主流のプロテスタントに対する、ベルギーのカトリックたちの反発もあった。そのような状況で、フランスに七月革命（1830）が起こるとベルギーにも独立革命が起こる。ベルギー臨時政府はフランスの支援とイギリスの支持を得てオランダと戦い、ロンドン会議で独立が認められた。しかしオランダは粘り腰で、最終講和条約が結ばれたのは1839年のことである。

以上の状況をふまえ、「鉛筆紀聞」第16問は「荷蘭十七州近古割て別にヘルニー一國を立て仏國に領すと云り是其國人の望なりや又仏國強ひて然するや」と問う。まず「是其國人の望なりや又仏國強ひて然するや」という間に、オランダとフランスの間をたゆたう鋤雲の心を読みたい。

回答は冒頭から危うい。二つの民族から成ると説明されるのはベルギーでなくオランダである。オランダにはオーストリア系とフランス系の民族がおり、イギリスが「荷蘭の互市頗る盛なるを妬み」分断を図ったのでベルギー独立革命が起こったこと、オランダが革命を平定できなかったこと、フランス王はフランス系の人々の要請に応じて版図拡大すべ

きだったのに出兵を憚ったこと、その結果、別の王が擁立されてベルギーが独立したこと、オランダの商業力と兵力は衰えたことを説明し、「終に英の術中に陥りたり」と言う。イギリスが商業上の競争相手であるオランダの成功を妬んでベルギー独立革命を扇動した結果ベルギーが独立し、オランダの富国強兵に揺さぶりをかけることに成功した、と言いたいようだ。「鉛筆紀聞」が、ヨーロッパの商業において成功したイギリスを敵視していることは明らかだ。

なおカションがベルギーに対するフランスの領土的野心を隠さないことに注意したい。遠い日本は当面フランスの野心の対象外だが、フランスの領土的野心自体は否定しないのだ。鋤雲はカションの言葉から、それを読み取ったに違いない。

③ 困難な企み―「宗教の深意」に触れる

日本人のキリスト教信仰が黙許されたのは1873年2月だが、カションは外国宣教会の会員として、箱館で日本人にも何らかの布教活動を行ったと思われる。カションは箱館で一再ならず傷害事件の被害者となるが、カションは同僚に、事件はカションに論破された僧侶の仕業である、と書き送っているのだ⁽¹³⁾。しかし「鉛筆紀聞」のカションはキリスト教の話をあまりしない。第3問の回答に青少年教育を支援するキリスト教徒の慈善家が登場するが、キリスト教について語るわけではない。

「鉛筆紀聞」でカションが真に宗教の深意に触れるのは、第13問「欧羅巴天子庶人一夫一婦且其婦人を貴ぶ亜細亜に過ぐと貴国亦然りや」に回答した夫婦論の部分である。カションはまず「各国略は同じ」と答え、その後イギリスとフランスの妻選びについて比較文化論を試み、「英は愛の辺に重く、仏は敬の辺に重し」と説明する。カションは根拠を示さないが、19世紀のイギリスとフランスの恋愛小説愛好者にとっては、お馴染みの世界である。19世紀イギリスの恋愛小説は基本的に婚活小説で、恋愛の先に結婚がある。それに対しフランスの恋愛小説は姦通小説であり、恋愛は、あるとすれば女性の結婚後に展開する⁽¹⁴⁾。カションによれば、子が幼いうちに一家の主が亡くなれば「家政は婦人に」頼るのだから、フランスでは、妻として「徳性ありて学問に達する者」を選んで「中心敬重する」という「鉛筆紀聞」の説明は明晰である。結婚は夫婦間の関係にとどまらず、子の地位確保にも関わる、と考えられているのだ。

さて一夫一婦は終身制か？ カションは「唯其一夫一婦終身更改せざる者は専ら宗教の深意にして決して政事の為に非るなり」と言う。すなわち離婚は民法でなく宗教の問題であるというのだ。カションはイギリス王ヘンリー8世に教皇殺しと9回の離婚をさせてイギリス国教会の形成を説明し、ヘンリー8世が「色に耽り、妻を逐はんと欲し」た事件により、宗教戦争とビルグリム・ファーズを説明する。もし「鉛筆紀聞」の記述どおり

にカションが語ったのなら、カションは策士である。キリスト教界の信仰上および教会体制上の大変革を無視して「是英と仏と宗教小異ある所以なり」と結ぶのだから。とにかく布教の企みは、あったとすれば失敗した。

読者はカションの説教の拙なさを責めるとともに、聞く耳持たぬ鋤雲に説教する困難を察すべきであろう。カションは鋤雲の牽制あるいは抵抗に屈したのかもしれない。

④ フランスの「誇示すへき盛挙」―外交の勝利

フランスのベルクールは1859年9月、アメリカのハリスとイギリスのオールコックに続き、江戸に常駐する三人目の正式な外国の外交代表として着任した。ベルクールは着任早々公信において、国際慣習法を理解しない日本に在勤する外交官の苦況を訴え、国際慣習法を日本人に伝える必要を説いている⁽¹⁵⁾。「鉛筆紀聞」のカションも、鋤雲に国際慣習法を説こうと企んだようである。カションのこの企みは早くも「鉛筆紀聞」第2問、士農工商に関する質問の回答に現れる。人材登用の話である。本人の希望がないのに力量を見込まれて登用された例として駐日特命全権フランス公使ベルクールに言及し、「アンバサドール」の説明をする。アンバサドールは皇帝の名代であり、日本で起きた事件はアンバサドールの考えで適切に処理され、皇帝といえども後から変更することはできない、と。

さて「鉛筆紀聞」の最後のテーマは外交である。各国通貨に関する第26問の回答は、外国船が来航する港に偽ドル検査施設を急いで設置する必要がある、という警告で終わる。これはカションのいわば小手調べである。それに続く「西洋各国、通商交易するものは和親の国とす苟も一旦同盟和親すれば又争鬭罅隙をおこすことなかるへし如何」という第27問には、「鉛筆紀聞」の外交感覚が窺える。回答は「鬭戦の用意あるは乃ち和親を固くする所以なり」と極めて明快であり、日本は600隻の軍艦を持たないと通商和親は難しい、と具体的でもある。すかさず鋤雲は「600隻の軍艦俄に製し得へきに非らず是を他邦より購ふは其費貲られず然れば如何して弁すへき」（第28問）と突っ込む。これに対しカションは、日本に必要とされる600隻の軍艦を購入するのは「未開の愚国」のすることで日本のすることではない、と断言する。数年足らずで難なく何隻も建造できるようになるのだから建造すべきだ、と。

ところで第二代駐日フランス公使ロッシュ⁽¹⁶⁾は1864年に着任すると間もなく、日本への武器輸出や日本からの生糸輸入など民間貿易の分野においてイギリスにとっても太刀打ちできないことを理解する。そこでフランスは幕府を支援し、幕府の事業に参入して利益を上げる方針を採用し、ロッシュは横浜仏語伝習所設立、幕府軍の三兵教練のためのフランス人技師、軍人招聘そして横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）建設を実現させる。これら三事業には、ロッシュの通訳となったカションと幕府の目付けとなっていた鋤雲が関与し

た。従って、この「鉛筆紀聞」第27、28の問答は、横須賀造船所の大事な礎のひとつ、と言わなくてはなるまい。

第28問の回答は、その後さらに迫真性を増し、「唐太のことの如き魯国日本の兵力拙きを侮り侵食するとも我より与ふるに非ずして彼れ暴を以て取らは後年船艦多く成兵力復壮なるに至り能取り返さんに何の難きことあらん」と鋤雲を鼓舞する。すなわちたとえ造船する間に領土を取られても、購入するより多くの船艦を持てるから、難なく取り戻せるではないか、というのがカシヨンの主張である。日本の対馬はロシアにとって海路の要地であり、また日本とロシアは樺太で国境を接しているのだから、「鉛筆紀聞」におけるロシアは、日本にとって最も警戒すべき国である。しかしカシヨンが鋤雲に勧めているのは造船事業を起こすことであり、もっとはっきり言えばフランス政府の支援による起業であり、断じてロシアとの戦闘ではない。フランスの敵はイギリスであり、ロシアではないのだ。カシヨンの企みを鋤雲は理解したであろう。第27、28の回答は明快である。「日本の軍艦なかる可からざる此一端に就き見るへし」が第28問の回答の結論である。

「鉛筆紀聞」最後の問は「仏国近来余国に誇示すへき盛挙ありや」である。「往々己を誇り、人を誇るの語あり」（「鉛筆紀聞題言」）と揶揄されたカシヨンが最後に誇ったのは、パリ会談（1856）である。第28問答がロシアで終わったのを受けて、ロシアが関係したクリミア戦争の終結を宣言する会談の話で「鉛筆紀聞」を締めくくるという趣向である。パリ会談のときカシヨンはすでにフランスを立ち、東アジアにいた。「魯国昨年和を講して」と静かに始め、「帝親しく仏京パリに至り謝せり」と威信を傷つけられたロシアについて淡々と語る。第29問の回答で目立つのは、フランスの歓待振り、ナポレオン三世が文明の利器「テレグラフ」（電信）を駆使してロシアのアレクサンドル二世を接遇する、その手厚さである。「鉛筆紀聞」が最後に誇るのは、ナポレオン三世のフランス外交の勝利だ。

鋤雲とカシヨンが「鉛筆紀聞」の最後に到達したのは、日本とフランスの協調外交への道だ。鋤雲はオランダを離れてフランスに近付き、カシヨンは外国宣教会宣教師の本務を忘れる。「鉛筆紀聞」成立後の1862年、鋤雲は士籍に列し、北蝦夷地（樺太）、国後、択捉に渡って警備の策を立てる。翌1863年、箱館に戻ると帰府命令が届いており、江戸に戻る。

注：

- (1) ウジェヌ＝エマニュエル・メルメ＝カシヨン Eugène-Emmanuel Mermet-Cachon (1828-89)、日本でカシヨンを通称としたことに鑑み、以後カシヨンとする。
- (2) 1869（明治2）年に『匏菴十首巻一、鉛筆紀聞』として公刊された。現在、最も容易に手に取ることができる「鉛筆紀聞」は『匏菴遺稿』による『成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』明治文学全集4、筑摩書房（1969年）である。ほかに『明治思想家集』日本現代文学全集13、

講談社（1968）、日本史籍協会編『菴菴遺稿一』東京大学出版会（1975復刻、底本『菴菴遺稿』1900）、『栗本鋤雲遺稿』慇文社（2007復刻、底本：栗本瀬兵衛編『栗本鋤雲遺稿』1943）もある。本論の引用は原則として明治文学全集版によったが、旧字体を新字体に、片かなを平がなに変更した。

- (3) 通称瀬兵衛、号は化鵬または菴菴。鋤雲は別号であったが、のちに通称とする。
- (4) 1849（嘉永2）年、幕府医官には蘭方医学を学ぶことが禁じられた。しかし1858年8月（安政5年7月）、蘭方医の伊東玄朴（1800-71）と戸塚静海（1799-1876）が幕府奥医師に登用され、幕府は奥詰表番各医師に蘭方医学兼習を許可した。
- (5) 『函館市史デジタル版』通説編第1巻第3編古代・中世・近世 第5章箱館開港 第6節開港と流通構造の変化 1 貿易開始とその経過 輸出品及びその金額の推移 表1、表2参照
- (6) フォルカード著中島昭子・小川早百合訳『幕末日仏交流記』（中公文庫）参照
- (7) ちなみに「鉛筆紀聞」は当初稿本として伝えられ、最初の活字本は柳川春三が手がけた海賊版で『仏蘭西カシオン氏口授鉛筆記聞』（柳園聚珍板、1868年?）という題だった。稲垣達郎「作品解説」『明治思想家集』日本現代文学全集13、講談社（1968年）399頁参照
- (8) 1859年8月30、31日および9月4日付け『リュニヴェール』誌、マルナス著久野桂一郎訳『日本キリスト教復活史』みすず書房、152頁以下より
- (9) マカオ（中国）1855年12月11日付編集長に宛てたオーベの手紙、朝比奈美知子訳『フランスから見た幕末維新「イリュストラシオン日本関係記事集」から』東信堂、15頁
- (10) たとえば『日本史広辞典』山川出版社の項目「ロシア軍艦対馬占領事件」参照
- (11) 稲垣達郎「作品解説」前掲書399頁参照
- (12) ただし前述のとおりカシオンは日本見聞記でヨーロッパの女性が有能であることを誇り、ナポレオン三世が死亡したら、息子が未成年の間はウージェニー皇妃が統治する、と語っている（マルナス前掲書160頁）。
- (13) 1861年8月20日付カシオンの手紙（マルナス前掲書192頁）。なお2年余あとの1863年11月22日のことだが初代フランス公使ベルクールは、老中から受け取った手紙によれば箱館のカシオン神父傷害事件の犯人は金蔵と称する教育のない下賤の身分の者で遠島の刑に処された、と記している。アラン・コルナイユ著谷田部厚彦編訳『幕末のフランス外交官初代駐日公使ベルクール』ミネルヴァ書房201頁。
- (14) そのような19世紀イギリスの恋愛小説の例としてはジェーン・オースティンの『高慢と偏見』、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エアー』、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』、フランスの恋愛小説の例としてはスタンダールの『赤と黒』、バルザックの『谷間のゆり』、フロベールの『ボヴァリー夫人』など。
- (15) 初代駐日フランス公使となるギュスターヴ・デュシェーヌ＝ド＝ベルクール Gustave Duchesne de Bellecourt 1817-81。デュシェーヌ＝ド＝ベルクールが姓だが、通称ベルクール。1859年9月6日江戸着任、22日江戸城にて批准書交換。コルナイユ前掲書12頁参照。
- (16) 第二代公使ミシェル＝ジュル＝マリ＝レオン・ロッシュ Michel-Jules-Marie-Léon Roches 1809-1900。

参考文献：

小野寺龍太『栗本鋤雲 大節を堅持した亡国の遺臣』ミネルヴァ書房